

『すべては、わたしたちのため』 ルカ2:8-20

2:8 さて、この地方で羊飼たちが夜、野宿しながら羊の群れの番をしていた。

2:9 すると主の御使が現れ、主の栄光が彼らをめぐり照したので、彼らは非常に恐れた。

2:10 御使は言った、「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。

2:11 きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。

2:12 あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである」。

2:13 するとたちまち、おびたしい天の軍勢が現れ、御使と一緒にになって神をさんびして言った、

2:14 「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」。

2:15 御使たちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼たちは「さあ、ベツレヘムへ行って、主がお知らせ下さったその出来事を見てこようではないか」と、互に語り合った。

2:16 そして急いで行って、マリヤとヨセフ、また飼葉おけに寝かしてある幼な子を捜しあてた。

2:17 彼らに会った上で、この子について自分たちに告げ知らされた事を、人々に伝えた。

2:18 人々はみな、羊飼たちが話してくれたことを聞いて、不思議に思った。

2:19 しかし、マリヤはこれらの事をことごとく心に留めて、思いめぐらしていた。

2:20 羊飼たちは、見聞きしたことが何もかも自分たちに語られたとおりであったので、神をあがめ、またさんびしながら帰って行った。

●序論

このクリスマスの物語を「すべては、わたしたちのため」という祝福を、自分たち向けられたものとして、引き寄せた聞いていただければ感謝です。

●本論

I. 羊飼いたちを最初とされた

ここで、み使いたちが告げる「救い主の誕生」のニュースを、”全人類を代表として”、ベツレヘム近郊で野宿していた羊飼いが聞いています。

2:9 すると主の御使が現れ、主の栄光が彼らをめぐり照したので、彼らは非常に恐れた。

「主の栄光が彼らをめぐり照らした」それはただ光りに包まれた…というだけではない、聖なる神さまの臨在が彼らを覆っていったのです。

だから、彼らは非常に恐れたのです。

なぜなら、彼らは当時の社会の最底辺に生きていた人たちでした。職業や宗教的な評価や身分において、また貧しさにおいても、周囲の人々から下に見られていた…、そういう人たちだったからです。自分たちのために天使があらわれることなど、想像もしない人たちでした。

しかし神さまは、この人たちに心を向けておられたのです。彼らを最初のクリスマスの目撃者となるように…と、すべての民の中でも最初の人たちとして選び、祝福されたのです。

2:10-11 御使は言った、「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。

「あなたがたのために」と告げる御使の言葉は、周囲や自分自身がもつ自己評価や身分や立場、劣等感のすべてを洗い流すメッセージです。

ここに神さまの愛があります。「主の栄光が彼らをつつむ」それはまさに神さまの圧倒的な思いやり、その愛が彼らを覆い尽くしたとも言ってもよいでしょう。

最初に、”全人類を代表として”羊飼いたちが、天使たちのクリスマスの招きを聞いたとお話ししました。

すなわち、羊飼いに世界で最初のクリスマスを示された方は、私たちにも「わたしのための救い主」としてこのクリスマスの喜びに連なることができるように、約2000年を経て今、わたしたちに伝えられているのです。

この日、お生まれになったイエスさまこそ、「あなたがたのための救い主ですよ」と。

Ⅱ. おさな子をしるしとされた

天使はこう告げています。

2:12 あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである」。

紹介されたのは赤ん坊でした。しかも飼い葉桶に寝かされているということは、まさに家畜小屋で生まれたということです。

だれもが、まさか！？そんなところで？と…いう、ような場所でお生まれになったのです。…でも羊飼いたちは、それを疑ったり問題にしたりしませんでした。なぜなら、「あなたがたのためにあなたがたのために救主がお生れになった」と言うてくださっていたからです

2:15-16 御使たちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは「さあ、ベツレヘムへ行って、主がお知らせ下さったその出来事を見てこようではないか」と、互に語り合った。そして急いで行って、マリヤとヨセフ、また飼葉おけに寝かしてある幼な子を探しあてた。

「最初のクリスマス」と題した本で、こう解説がありました。

「その誕生を目撃した羊飼いたち。名前も知れず、今後もその名が明らかになることはない、その名もなき羊飼いたちに、われわれは敬意を表する。…」と。
 なぜなら、彼らは、すぐに見に行こうと立ち上がることができた「信じる人」であったからです。

そのとき、その幼子を信じるに値するような、輝きや装飾もなければ、家来や天使たちの軍勢も、家畜小屋にあったわけではありません。

そこにあったのは飼葉桶とヨセフとマリヤと、そしてわずかな明かりであったことを。あったのはワラや動物の匂いであったことを、いわゆる救い主の神々しさや雰囲気搔き立てるものは一切なかったことをわたしたちは思うのです。

その上で、そこに辿り着いた羊飼いたちの心に目を留めたいのです。

彼らは、それでもその赤ん坊を信じたのです。

2:20 羊飼たちは、見聞きしたことが何もかも自分たちに語られたとおりであったので、神をあがめ、またさんびしながら帰って行った。

聞いて、見たのは、飼葉おけに寝かされた赤ん坊のみ。でも彼らは信じたのです。信仰のみが、その最初のクリスマスを彩るにふさわしい、目に見えない美しい賛美の彩りとなっていました。

キリストの生涯は、この家畜小屋から始まってゴルゴタの丘の十字架の処刑に至ります。

イエス・キリストは私たちを愛し、私たちの罪を背負い、身代わりになって十字架で死ぬために、このようにお生まれになった。これが聖書が語る真実です。
 このクリスマスは、あの羊飼いとと同じ仕方で、花を添えたいのです。ただこの方を救い主として信じることのみです。そうして初めて私たちはクリスマスの真実な愛と意味を味わい知ることができるのです。

Ⅲ. 生きる力を与えてくださった

羊飼いたちは、神さまを崇めながら、また日常の生活に帰って行きました。

しかし彼らは以前と何かが違っていたのです。彼らは救い主を信じた。そしてそこで、救い主の誕生を見ることで、神さまからの生きる力と希望を得たからです。それはどういうものなのだったのでしょうか？

今年は、終戦80年という節目です。あの戦争は何だったのか？ 知るのは、日本であろうと、世界のどこであろうと、「人は狂気に巻き取られていく」ということです。あの先の大戦中に、タイなどで日本軍が捕虜たちを過酷に扱った記録が多くあります。

「クワイ河収容所」という本。そこには、日本人が、イギリス兵たち数万人を捕虜として過酷な熱帯雨林の中で強制労働をさせていたという記録があります。

1943年クワイ河の日本軍捕虜収容所。

しかし、この本の著者の目的は、日本人・日本軍の残虐性を告発することではあり

ませんでした。むしろそのような状況の中で起こった「奇跡」を語ることだったのです。

過酷な捕虜生活と強制労働の中で生きる気力を失い、捕虜同士の中では、獣よりも醜い争いがあり、モラルも、倫理観も失われていった。

そのどん底の現実の中から、キリストを信じる信仰によって、その人々の人間性が回復されていったという奇跡が記されているのです。

ある時の事件をきっかけに変化が起こりました。極限状態の中で、数人の捕虜たちの自己犠牲的な行為が収容所全体の雰囲気を変えていきました。彼らの中にやさしさやいたわりの心が生み出されていったのです。

そんな中で、幾人かの捕虜たちは聖書をあらためて読み始めました。そうして、かつて知っていたつもりでいたイエス・キリストに目が開かれる経験をしました。☆「イエスは我々と同じようになってくれたお方だったのとわかった」というのです。

彼らはイエス・キリストを見出し、またそこから「生きることの意味、人間らしく生きるとはどういうことなのか」を学んでいきました。

「私たち全員が、目覚めの体験をしていた。人は顔に微笑みを浮かべるようになり、笑い声を上げ、歌を口ずさむようにすらなっていた」

...

そうやって1943年のクリスマス。そのジャングルの中の収容所の教会で行われたクリスマス礼拝には2千人の捕虜が集まったと記録されています。

まさに、彼らは「生きる力」を見出したのです。

●さいごに

聖書は、こう述べています。

1ヨハネ4:9 神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生かすようにして下さった。それによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。

あの体験をした著者が、「イエスは我々と同じようになってくれたお方だったのだ」と見い出しました。

まさに羊飼いたちが、来て、見て信じた経験も同様だったのではないのでしょうか。

その証は、イエスさまのあの十字架で表されます。

醜い憎しみにあふれたこの世で、その罪をすべて背負って十字架で身代わりに死んで、神の愛と赦しを宣言された救い主のありさまです。

わたしは、先ほどジャングルの捕虜収容所で、教会が起こされて、そこに2千人ほどの捕虜が集まったという記録に感動します。

あの羊飼いたちのように、「さあ行こう」という、ただ信じる人たちが集まったということが、表されているのです。

このクリスマス。そういう集いとして、さらに祝いの時を過ごせたら幸いです。